

(20) 以下の通り訂正いたします。

## P194 共同発表者削除

誤

### 139) 周手術期演習における危険予知トレーニングの効果の検証

○岡本佐智子<sup>1</sup>，佐藤安代<sup>1</sup>，志間佐和<sup>1</sup>，古矢優子<sup>1</sup>，藤澤博子<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 日本保健医療大学保健医療学部看護学科

#### 【目的】

医療現場では、医療事故を防止するために危険予知トレーニング（以下KYT）を導入し、事故を未然に防ぐ取り組みがなされている。看護基礎教育では臨地実習において看護学生の1割程度がインシデント・アクシデントを経験し、その中でも成人看護学の急性期実習の発生件数が高かったという報告がある。KYTは、イラストや写真を見せ、その状況にある潜在的危険を指摘させ、改善点を考えるトレーニングであるが、学生はイラストや写真では、患者の状況をイメージするのが難しい。そこで本研究では、学生がお互いに患者役と看護師役となって行うロールプレイングを組み込みこんだKYTの教育効果について検討を行った。

#### 【研究方法】

方法：2015年5月、A大学看護学科2年次生109名をグループ（5～6人）に分け、患者役と看護師役で、胃切除術後の初回歩行をロールプレイングで実施した。その後、KYT基礎4ラウンド法により、現状把握から目標設定までを体験した後、無記名自記式質問紙調査を行った。倫理的配慮：紙面と口頭で目的と方法、研究協力は任意で評価に関係しないこと、本人が特定されないよう取り扱うことなどを説明の上、署名にて同意を得た。日本保健医療大学倫理委員会の承認（2701-1）を得た。

#### 【結果】

研究の同意を得られた協力者は102名（回収率93.6%）であった。術後1日目の初回歩行のリスクについて、自分自身で「転倒のリスクについて考えることができた」94.1%、「ドレーン類が抜けるリスクについて考えることができた」81.4%、「歩行時、血栓が流れて肺塞栓になるリスクについて考えることができた」39.2%であった。肺塞栓のリスクについては、グループで話し合うことにより考えることができたのは52.0%であった。危険防止について、自分自身で「具体策を考えることができた」80.4%、「妥当だと思える行動目標を考えることができた」80.4%であった。

#### 【考察】

転倒のリスクやドレーン類抜去のリスクについては、大半の学生が自分自身で気づくことができていた。しかし、血栓が流れて肺塞栓になるリスクについては、自分で気づけた学生は4割程度で、話し合いを経ても半数程度が、気づくことができていなかった。気づくことができた危険については、大半が自分自身で具体策を考えることができていた。ロールプレイングという手法は、ドレーンなど目に見える危険についてはイメージする助けになるが、体内で起こる危険については、気づきにくいのではないかと考えられた。このことから、目に見えないリスクに気づけるよう、ファシリテーターの介入や講義との関連で理解を深める工夫が必要であると考えられた。

正

### 139) 周手術期演習における危険予知トレーニングの効果の検証

○岡本佐智子<sup>1</sup>，佐藤安代<sup>1</sup>，古矢優子<sup>1</sup>，藤澤博子<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 日本保健医療大学保健医療学部看護学科

#### 【目的】

医療現場では、医療事故を防止するために危険予知トレーニング（以下KYT）を導入し、事故を未然に防ぐ取り組みがなされている。看護基礎教育では臨地実習において看護学生の1割程度がインシデント・アクシデントを経験し、その中でも成人看護学の急性期実習の発生件数が高かったという報告がある。KYTは、イラストや写真を見せ、その状況にある潜在的危険を指摘させ、改善点を考えるトレーニングであるが、学生はイラストや写真では、患者の状況をイメージするのが難しい。そこで本研究では、学生がお互いに患者役と看護師役となって行うロールプレイングを組み込みこんだKYTの教育効果について検討を行った。

#### 【研究方法】

方法：2015年5月、A大学看護学科2年次生109名をグループ（5～6人）に分け、患者役と看護師役で、胃切除術後の初回歩行をロールプレイングで実施した。その後、KYT基礎4ラウンド法により、現状把握から目標設定までを体験した後、無記名自記式質問紙調査を行った。倫理的配慮：紙面と口頭で目的と方法、研究協力は任意で評価に関係しないこと、本人が特定されないよう取り扱うことなどを説明の上、署名にて同意を得た。日本保健医療大学倫理委員会の承認（2701-1）を得た。

#### 【結果】

研究の同意を得られた協力者は102名（回収率93.6%）であった。術後1日目の初回歩行のリスクについて、自分自身で「転倒のリスクについて考えることができた」94.1%、「ドレーン類が抜けるリスクについて考えることができた」81.4%、「歩行時、血栓が流れて肺塞栓になるリスクについて考えることができた」39.2%であった。肺塞栓のリスクについては、グループで話し合うことにより考えることができたのは52.0%であった。危険防止について、自分自身で「具体策を考えることができた」80.4%、「妥当だと思える行動目標を考えることができた」80.4%であった。

#### 【考察】

転倒のリスクやドレーン類抜去のリスクについては、大半の学生が自分自身で気づくことができていた。しかし、血栓が流れて肺塞栓になるリスクについては、自分で気づけた学生は4割程度で、話し合いを経ても半数程度が、気づくことができていなかった。気づくことができた危険については、大半が自分自身で具体策を考えることができていた。ロールプレイングという手法は、ドレーンなど目に見える危険についてはイメージする助けになるが、体内で起こる危険については、気づきにくいのではないかと考えられた。このことから、目に見えないリスクに気づけるよう、ファシリテーターの介入や講義との関連で理解を深める工夫が必要であると考えられた。